

真言宗にとって有意義な書

法会儀則専門委員会委員
真言宗豊山派事相研究所所長 戸部 謹爾

道友、水野真圓さんによる『加持祈祷両界曼荼羅筆集』がこのほどノンブル社より刊行された。この発刊は、真言宗にとって大変に有意義、かつ慶祝すべきことである。それは、この書には近年あまり見られなくなった、実践による青年僧の事相研鑽の成果が溢れているからである。

私は、事相研究にあたって、文献学的な手法を用いることを否定はしない。しかし、博引旁証にこだわり過ぎる近年の傾向には、若干違和感を覚えることもある。

著者の水野さんは、受法すると、受けっぱなしではなく、先ず自分で修法してみろという、いわゆる「実修実証型」を貫いている。興教大師の「若し鑊が虚言とならば、これを修して自ら知れ」を自己のものとしてとらえ、二十数年間、そのスタンスを変えていない。つまり、彼にとつて儀軌等の文献は、文章を書くためではなく、修すためのものである。

本書のタイトルを見る限りでは、何が書かれているのか、その中味を推し量ることが難しいようにも思えるが、読んでみると、これほどピタッとした題名はない。

もともと、その時々々の論文を集輯したものであるが、その中でもしばしば出てくるのが「聖天さま」である。

全体的にも「聖天篇水の巻」に多くの紙面を費やしているが、「般若理趣経」や「投花得仏」という、一見すると関連が薄いと思われるがちな項目にまで登場せしめている。これらはすべて、著者の「聖天さま」に対する煮えたぎるような信仰の発露である。行間紙背にも、ほとぼしるが如くの、まさに聖天行者ならではの筆勢が感じられる。

断定決択に少々強引な部分も無くはないが、経軌・口訣類で補欠するよりも、自由奔放な文面に、かえって好感がもてる。

権田雷斧大阿闍梨は、布教をするために教相を学んだとの余話を仄聞したことがある。本書中の布教実例では、権田師同様、布教のために事相の奥儀を尋求している様子が伺える。加えて、彼は武道の達人であることから、仏の前では、謙虚でありながら、ひた向きであり、篤実そのもので、これが伝導者、布教者としての厚みを増している。

理論と実践との融和を図ること、つまり「知行合一」こそが著者の真骨頂であり、本書は彼の受法と研究と実修とを具現化したものといえる。

今後也更なる精進を期待すると共に、本書が多くの人々に読まれることを期し、推薦の言葉とする。

密教の祈り・修法にこめる一大事！

法会儀則専門委員会委員
真言宗豊山派事相研究所所長 登坂 高典

このたび愛知大御堂寺野間大坊水野真圓師の『加持祈祷両界曼荼羅筆集』が刊行されることは、誠に嬉しい限りである。

師は不二会の中にあつて、常に前会長故三津田辨徳僧正を仰ぎ見て、親しく受法を授かりながらも師承を重んじ研鑽の志を忘れず、後学のために「作法の疑問を追求し続け、堅忍不拔の意志を貫いた。数々の法縁を得ながらどんな時でも実直にして真摯な態度で臨み、古徳の論説を紐解きその真意を諄々と示した。独特の表記は資性高潔な師の徳風である。

事教二相の両輪が同時に回転し、両翼が同時に羽ばたくために、密教の祈りである修法を解説し作法に秘められている教理を指して実義が如何に大切かを本書は訴えている。行者の厳守すべき禁戒を止めながら、莊嚴料理の一つが教義を象徴していることを説き、修法に際して印言の結誦と同時に秘められた教理と曼荼羅觀を念頭に想起しなければならぬことを解いている。

また師の歡喜天に対する理解の博さに驚き、相對峙して信仰する至誠に敬意を表するとともに、顕著な書物が少ない中、感得した歡喜天に関する理解とその靈徳を稀書にまとめ活字にしたことを有り難く思う。

この論書を熟読され、自身の作法を顧み見詰めなおす機会となれば幸いである。筐底に蔵することなく活用いただき、法灯護持・宗学発展の一端を担うものとなることを念じて、推薦のことばとする。

合掌

【主要項目】

護摩篇 地の巻

蘇・蜜・油 一考 命の曼荼羅を開く
蘇・蜜そして油とは――事相は支度が大事！

加持祈祷の実例

私の祈祷法――具体例を付した資料であかす

聖天篇 水の巻

歡喜天浴油供概説 小序

巨大な力と絶大な利益、愛の秘仏、歡喜天

歡喜天浴油供概説

聖天供を修してその法の無魔成満を期する

修法の実際 聖天浴油供の真髓

なぜ人は聖天浴油供を修するのか

聖天供の種時き

浴油への道

聖天供、護摩供は真言密教の真髓

「後七日御修法西院聖天供次第」について

大法立の秘法

（続）後七日御修法西院聖天供次第

御修法の素晴らしさにふれて

灌頂篇 火の巻

結縁灌頂

各寺院で結縁灌頂を行う場合

伝流投花得仏の大事

胎の巻

伝法灌頂はあっても、投花得仏の機会がない

現図篇 風の巻

外金剛部院と最外院

事実を一つ一つ積み重ねて両界現図曼荼羅の真実に近づく

現図の五大明王

五大明王は大師の重要な思想、両部不二、即身成仏の鍵

『般若理趣経』と両界曼荼羅

理趣経系諸尊は両界曼荼羅に如何に摂入されているか

雑筆篇 空の巻

付録① 十八総大本山勤行集（岩田邦雄）

付録② 研究報告

多くの方がこの著作に触れて
大いに驚覚されんことを願う

真言宗機関紙『六太新報』論説委員 今野 本 證

十一月十九日、雨の中、所用で新宿まで出かけた。時間があつたので紀伊國屋書店の仏教書コーナーに立ち寄ると、護摩修法中の写真が表紙を飾る平積みの本を見つけた。手にしてみると、その題名は『加持祈禱両界曼荼羅雑筆集』。なんとという奇抜な題名かと思いきや、よくよく見ると著者は法兄、水野眞圓師ではないか。師にはよく伝授で同席させていただき、色々とご指導たまわり、また便宜を計っていたいただいた事再三である。初めて出会ったときから、熱く聖天信仰を語られていたが、今回の著作はその軌跡が詳細に綴られている。

著者、水野眞圓師は愛知県美浜町にある真言宗豊山派、大御堂寺（野間大坊）副住職として日々護摩祈禱と月に二回の聖天浴油法の修行により、多くの信徒の願いに応えている。

本書は、師がいままで発表された論文を集成したもので、護摩篇（地の巻）、聖天篇（水の巻）、灌頂篇（火の巻）、現図篇（風の巻）、雑筆篇（空の巻）の五章にわかれている。そのすべてにわたり、アプローチの方法が型破りで面白い。

たとえば灌頂の授華得仏の論文を書くにあたり、自坊に灌頂壇を荘厳し、百日間両界曼荼羅に授華を試みるなど、常人では思いもよらない手法をとっている。

また聖天法に対する論者にも、その情熱のほどが随所に見られる。聖天の行者は、私の知る限りでは皆熱心であり、畏敬の念に溢れている。しかし、著者の帰依ぶりは、また独特の深いものがある。本書からその一例を紹介すると、

「私は浴油修法し終ったまだ熱い歓喜天を何度もほおずりし、次回も修法できますようにと願い天尊を御厨子におさめた。私は歓喜天に何度も自らの徳のなき、悪業をわびた。歓喜天は大悲の心で笑って許してくれた。歓喜天にあえてよかった、生きているうちに歓喜天浴油供を修法することができてよかった、生きてよかった。」

とかく何の法でも伝授を受けた後は実修しない、ただ受けただけの「いただき伝授」になりがち（私もその一人）だが、多くの方がこの著作に触れて大いに驚覚されることを願っている。

護摩供・聖天供・得仏作法などのほか、
現図曼荼羅を細部にわたり検証する氣鋭による書

◆著者略歴

水野眞圓（みずの・しんえん）

一九六一年、愛知県美浜町生まれ
大正大学大学院修士課程修了後、高野山眞別処に
国内留学。一九八六年より真言宗豊山派総合研究
院事相研究所研究員
現在、大御堂寺（野間大坊、愛知）副住職、不二
会会員、祈禱師



A5判・四一二頁
定価三九〇円
ISBN978-4-903470-42-9

▶大御堂寺本堂（重文）



♣ご注文・お問合せは下記へお願いします

図書出版 **ノンブル社**

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F
電話 03-3203-3357 FAX 03-3203-2156

事相研究家が画く いのちの曼荼羅世界

加持祈禱 両界曼荼羅 雑筆集

愛知・野間大坊
水野眞圓

護摩篇 地の巻
聖天篇 水の巻
灌頂篇 火の巻
現図篇 風の巻
雑筆篇 空の巻

真言宗各派における

教師の参考資料の一助として

二十二年間にわたる事相研究の成果を開陳！



ノンブル社